

韓国ソウル特別市・清溪川における河川の空間構成と利用者行動に関する調査研究

A Study on the spatial structure of Cheonggyecheon and user behavior in Seoul Special City, Korea

○青木秀史¹, 石射卓¹, 日比野百合子¹, 鈴木直², 畔柳昭雄³, 坪井塑太郎³
 Hidefumi Aoki¹, Taku Ishii¹, Yuriko Hibino¹, Nao Suzuki², Akio Kuroyanagi³, Sotaro Tsuboi³

Abstract: In this research, observational researches, such as user number investigation and an institution, were performed for Cheonggyecheon, and the user number and space composition in a river have been grasped. As a result, it turns out that there are many users compared with other sections in the three sections of 22nd division throughout between bridges. And when the space composition of the three sections was found, the feature of the stairs etc. which are improved the open space which can perform an event etc., the level difference put close to the waterside, and near the bridge was seen. As mentioned above, in this research, it was shown clearly that the space composition in a river has affected the user number.

1. はじめに

韓国においてはソウル特別市の中心部を流れる清溪川が 2005 年に再生された。この河川は、旧来市民の生活の場として利用されてきたが、都市化に伴う交通整備のため 1950 年代後半より河川空間を道路交通路として利用するための覆蓋工事や高架道路建設が進められ、暗渠化された。しかし 2000 年代に入り高架道路の老朽化に伴う補修費用の増大や都市環境の回復等の理由から、河道の復元工事が行われ、2005 年には親水河川として再生された。その結果、清溪川には毎年約 1200 万人の人々が来訪するなど、ソウル市の観光地としても機能するようになった。

清溪川を対象とした調査研究は、西名ら^[1]の河川利用者行動特性に関する研究や朴ら^[2]の河川内からみた景観特性に関する研究などが行われている。しかし、本研究では都市の水辺の意義や利用のあり方を検討する観点から、河川内の空間構成と利用者人数を把握することが重要であると考え、河川内の空間構成と利用者人数の関係を明らかにすることを目的とする。

2. 調査概要

Table 1 に調査概要を、Figure 1 に調査対象地を示す。利用者人数調査では、通過のみの人を「通行者」、水に触れる、休息等の水辺で滞留・滞りが主となる人を「滞留者」とし、両者を合算した人数を「利用者」と定義する。

調査実施にあたっては、橋梁間^[3]を単位とした計 22 区間を平日と休日の 2 日間、9 時から 19 時までの一時間毎、カウンターを用いて定時計測を行った。観察調査は河川内構造物の位置、数の実測を行い地図化を行った。

Table 1.outline of study

調査対象地	韓国ソウル特別市・清溪川		
調査期間	2011 年 8 月 16 日～ 20 日		
調査日付	16 日(火)	17 日(水)	18 日(木),20 日(土)
調査方法	ヒアリング調査	施設等観察調査	利用者人数調査
調査対象	施設公園管理者	アプローチ(階段等) 掲示物(警告看板等) ベンチ等(設備),その他	通行者,滞留者

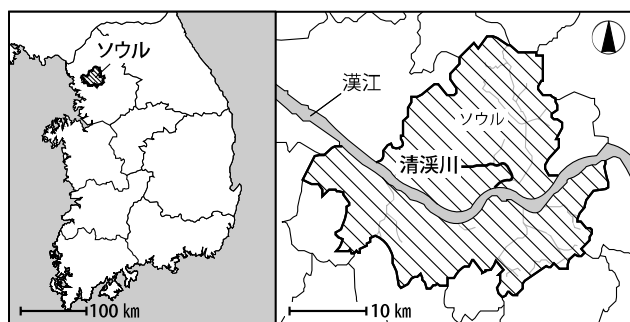


Figure 1.ground for investigation

3. 平日,休日における河川内の利用者人数

Figure 2 に 1~22 の清溪川の橋梁と a~v の橋梁間、Figure 3 に平日と休日の利用者人数を示す。

平日の通行者は d 区間で最大 453 人、滞留者は b 区間で最大 836 人であった。また休日の通行者は b 区間で最大 1067 人、滞留者は b 区間で最大 1650 人であった。

平日と休日を比較すると、平日に比べ通行者は約 2.4 倍、滞在者は約 2 倍の人数を示し、平日の利用者人数が多い区間で休日も多くなっていることがわかる。

以上より平日と休日では利用者人数に大きな違いがあることがわかるとともに、特に b,d,n の橋梁間では他の橋梁間と比較すると平日,休日ともに通行者,滞在者の多いことがわかる。そこで,b,d,n の 3 つの橋梁間に着目し、空間構成と滞留人数の関係について、検討する。

1 : 日大理工・学部・海建 Nihon Univ. 2 : 日大理工・院・海建 Graduate School, Nihon Univ.

3 : 日大理工・教員・海建 Prof, CST, Nihon Univ, Dr. Eng

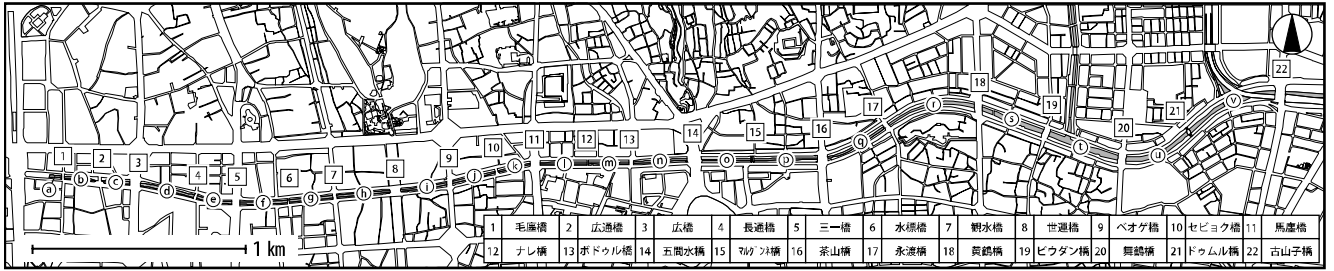


Figure 2.the locations of bridges and bridges between

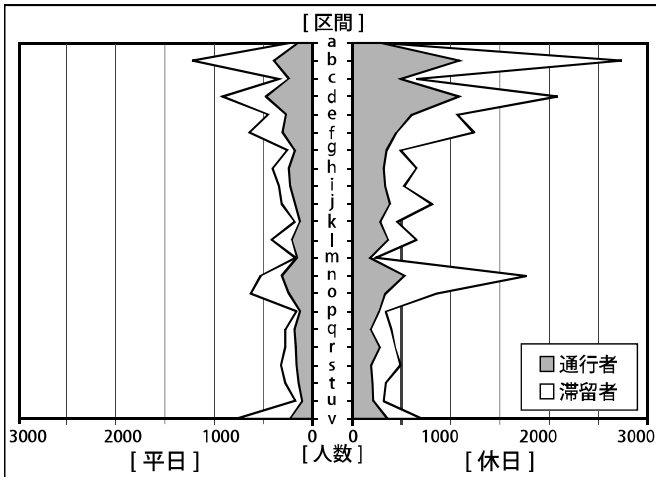


Figure 3.the user number between bridges

4. 各橋梁間の滞留場所における空間構成

Figure 4 に橋梁間の写真と空間構成図を示す.

b 区間は橋梁間の水辺に沿って人が腰掛けられる形態の護岸が続き,人が水に容易に近づける形態になっている.また観光の起点であり,多くの来訪者が入場する a 区間の近くに位置している.

d 区間は 3 の橋梁の幅が広く,橋梁下には人が腰掛けられる護岸やギャラリーが付設されている.

n 区間は河川内にイベントステージの他,ベンチ等の休憩施設も多く設置されている.また橋の付近には周辺地区から河川への階段が 3 ヶ所整備されている.

以上より清溪川における利用者の滞留には,水に触れることで自然を親しむと同時に,イベントが行えるオープンスペースや人を誘引する形態的要因が寄与していることがわかる.

5. おわりに

本研究では,清溪川における通行者,滞留者や施設等を捉えることにより,清溪川内の空間構成と利用者人数の関係性を明らかにした.今後は時間帯別での利用状況や清溪川と周辺環境との関係性を検討することが重要と考える.

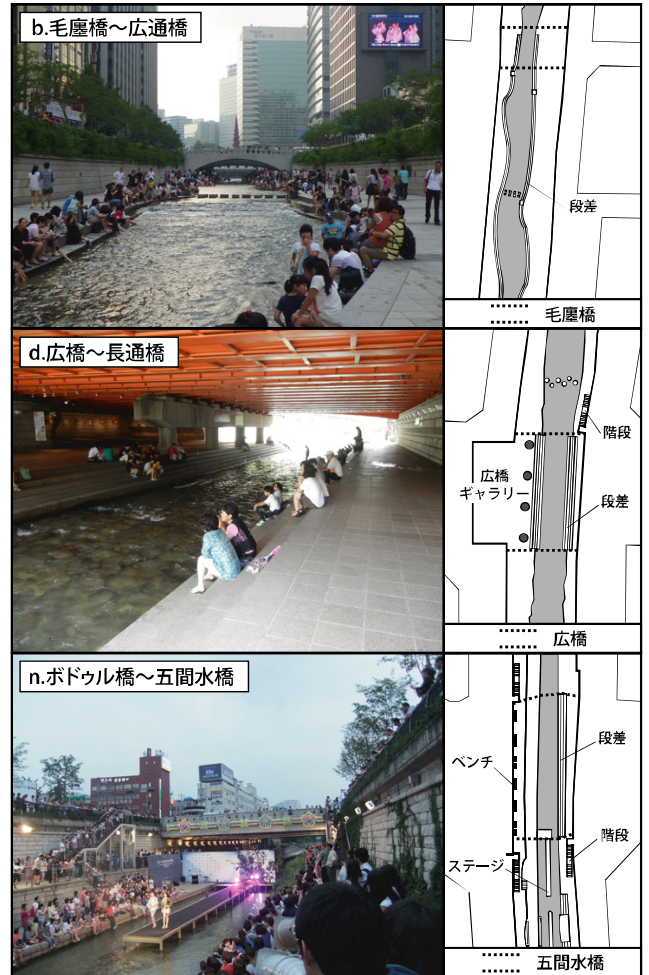


Figure 4.the picture and composition between bridges

6. 補注および参考文献

- [1] 西名 大作, 他 2 名:「韓国清溪川における河川利用行動特性に関する調査研究」,日本建築学会中国支部研究報告集, 第 31 巻, No.401,2008 年
- [2] 朴 賛弼:「ソウル再生における都市構造の空間構成に関する研究 - その 1 清溪川復元による視覚的評価分析 - 」,日本建築学会大会学術講演便概集(中国),No. 5542,2008 年
- [3] Figure 2 の a において清溪川の始点から 1 の橋梁までを 1 区間とする.
- [4] 清溪川文化館:「清溪川復元」,資料,pp.2-15,2006 年